

(実践報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	病院併設型在宅医療部門における緊急電話およびその対応の実際
演者名	池島英之
所属	天理よろづ相談所病院 在宅世話どりセンター

目的

当在宅センターは病院併設型在宅医療部門という特殊な形態の在宅医療センターである。医療依存度の高い患者が自院より紹介され、専門外来とのつながりを持ちながら在宅対応を行うことができるため、緊急対応が必要な患者の在宅への受け入れが可能である。一方で医療従事者の負担も大きいとかがえられるが、実際にどれだけの負担があり、どのような対応が必要なのか、把握できていない。今回その実状把握目的に、当センターでの一定期間中の緊急電話対応および全電話対応の頻度と内容から緊急対応について特殊性があるのかを考察した。

実践内容

当センターナースに協力していただき、2014年4月14日から5月31日までの間に当センターの固定電話および緊急呼び出し携帯電話にかかってきた件数および要件、またその対応を前向きにデータ収集した。

実践効果

期間中に当センターに在籍していた患者数は50名で、上記期間にかかってきた全電話連絡件数は207件、そのうち緊急呼び出し携帯電話への連絡件数は53件であった。病状変化に関する要件は78件あり、緊急往診を要した件数は9件、そのうち3件が看取りであった。看取りについては休日日中、夜間に発生していた。深夜帯の連絡件数は17件であったが、緊急往診を要したものは看取りの1件のみであった。

緊急呼び出し携帯電話への連絡内容については急な発熱およびその経過報告が47%、病状報告のみが33%と大半を占めていた。看取りを除く緊急対応は発熱に対する対応が主であったが、事前の準備(頓服など)により、電話指示のみで対応できた。

考察

看取りも含めた緊急往診件数は期間中9件と少なく、医療的処置についても電話指示およびその経過報告で十分に対応可能なことが多かった。医療依存度の高い患者層を対象としていても、実際の緊急対応は特殊なものではなく、対応困難なものでもないことがわかった。